

外部評価委員からの報告書

— 全体的感想について —

外部評価委員 坪野谷 雅之 氏

1. 全カリに関する資料等について

平成 16 年 5 月に、外部評価委員の依頼を受けて迷いながらも受諾した処、後日正式な委嘱状と膨大な資料が郵送されてきました。7 月の通知では 10 月に、全カリの実効について教職員・学生へのヒアリングが行われるとのことでした。まだ時間があるから大丈夫だろうと、仕事の合間をぬって時折バラバラと資料をめくっては、委員の受諾とその役割の重大さをひしひしと感じていました。

ヒアリングの時期も迫り、先ず「立教大学〈全カリ〉のすべて—リベラル・アーツの再構築」（東信堂 2001 年）を読みましたが、全カリの理念と制度は 21 世紀に向けた立教大学の苦闘の記録であると「はしがき」に述べられているように、正に歴史的背景と実現の苦心等が理解できました。一方、ビジネス書と違って観念的かつアカデミックな内容でなかなかこずったのも事実です。

「2004 年度履修要項」と別冊の「講義内容」の分厚い本を手にとると、多

くの学生が大学でどう学んで良いか分からない時代にあって、実に懇切丁寧に記述されており、特に「講義の内容」では（ねらい）（授業方法）（授業内容）（成績評価方法）（教科書）（参考書）とキメ細かい配慮がなされています。

次に、全カリセンターが発行する学内への啓蒙・情宣活動の媒体である「大学教育研究フォーラム」全 9 冊（1996～2004 年）は毎年テーマを変えて発行され、多くの教職員による現場の意見が率直に寄せられていました。なかでも 2003 年の「全カリ 5 年間の成果と展望」と 2004 年の「教育評価、それは可能か」を興味深く読みました。同様に「全カリニューズレター」（No. 1～19）は端的にまとめられて年 3 回発行され、学内外への有用な広報媒体として役に立つものと思われまます。更には、「立教大学白書」「立教大学相互評価調書」等、資料は豊富で事欠かない程でした。最も注目したのは、「平成 15 年度特色ある大学教育支援プログラム」補足資料及び審査資料です。

（後記）

平成 16 年 10 月 16 日（土）の終日、

教職員・学生に対する外部評価委員のヒアリングが行われました。全くの門外漢であり資料の説込み不足の上に、各委員が錚々たる教育の専門家であるため、正直のところその場にいることに当惑しました。

ヒアリングに際して、一応次の3点の問題意識を持って臨みました。

- 1) 全カリについて、学生はその意義・学習運営要領等を良く理解しているのだろうか。
- 2) 全カリを学生は自分の意思で真剣に学習し、自分の教養・専門性を修得する努力をしているのだろうか。
- 3) 全カリが真に学生のニーズと目線に合った内容、或いは、現在の社会の求める合理的な教育システムなのだろうか。

また、「大学環境調査」(2000年度)の立教大学の学生に対するアンケートの中で、高いパーセンテージを示した次の3項目についても興味を持って臨みました。

- 1) この大学では教育方法やカリキュラムの改善に取り組んでいる (74.0%)
- 2) 学生の勉学意欲を駆り立てるような教育方法を工夫している教師は少ない (79.0%)
- 3) 学生は自分や社会への関心呼び覚ましてくれる授業を期待している (89.6%)

2. 全カリの PLAN-DO-CHECK-ACTION について

ビジネス界では、全ての業務、特に、プロジェクトでは、PLAN (目標・施策) — DO (実行・実践) — CHECK (反省・評価) — ACTION (改善・改革) というプロセスが常識ですので、全カリの感想についてもこの手法に沿って、断片的ですが自分の理解の範囲内で述べたいと思います。

(1) 全カリの「PLAN：目標・施策」

- 1) 全カリは、建学の精神に基づき、全学が運営する教養教育として、専門教育と連携し、「専門性ある教養人」を育成することを目標とする。
- 2) 全カリは、総合的視野に基づく現代的課題への認識を培う(総合教育科目)、並びに、外国語によるコミュニケーション能力と異文化対応能力を育てる(言語教育科目)で構成される。
- 3) 「全カリ運営センター」が他大学にない独自のカリキュラム運営の維持・革新を保障する。全カリの特徴は、①他に類を見ない豊富な科目の展開、②全学部の学生に対して共通、③1・2年生だけでなく全学生が対象である。(「全カリニューズレター No.19」2004.3.31)

【資料・ヒアリングを通じた感想】

観念的かつアカデミックな膨大な資

料の中では、“何のために全カリをするのか”という視点で、その目標・目的が比較的分かり易くまとめられた文章ですので敢えて掲載しました。学生は全カリについて大分理解しているようですが、入学すると好むと好まざるとに拘らず全カリを受動的に受け入れざるを得ない立場にあります。

そのためには大学が全カリの目指すもの、ビジョンや運営要領等をもっと簡潔に分かり易く表現し、それが充分に浸透するようにガイダンス・履修相談室・資料等一層の創意工夫が必要であると思料されます。はっきり言って外部の者には目標・目的の表現が分かり難いと感じました。

(2) 全カリの「DO：実行・実践」

【全カリニューズレター No.19】に次のように記載されています。1997年の全面実施以来2003年で7年目を迎え、全カリ適用の卒業生数は9,114人である。2003年度における全カリ展開のコマ数は2,274コマ、学部段階の総展開コマ数5,815コマの30%を占める。また、専任教員担当率は例年約60%である。学生は全カリを卒業単位以上に修得しているのは、学生が魅力的であることを証明するものである。

【資料・ヒアリングを通じた感想】

学生は概ね満足している様子が伺えますが、前述のように学生は全カリを受動的に受け入れざるを得ないので、適用数を単純に計上してもあま

り意味がないのではないかとと思われる。教養教育の土壌づくりとして何をどのように実施・実践したかをもっと魅力的に表現して学生にPRすると共に、教育効果の測定に関しての資料をもっと提示する工夫が必要と思料されます。

教養教育と専門教育の連携の実効に関しては、多くの意見がありますが現場の声として、「全員が一般教育も専門教育も担当するということは、一見正しく美しい。しかし、そのことがかえって負のスパイラルに全員を巻き込んで行く危険性」（「大学教育研究フォーラム4」）、「専門学部の運営と全カリの運営がシステムとして分離されており、残念ながら十分に連携が取られているとはいえません」（「大学教育研究フォーラム8」）とも言われているのが気になります。

(3) 全カリの「CHECK：反省・評価」

取組みの成果は、「立教大学環境調査」における全カリ実施前と実施後の比較データに顕著に現れている。とりわけ全カリ実施後の1年次生が高く評価している。また、「学生生活実態調査」においても、全カリの目覚ましい成果が現れている。（「全カリニューズレター No.19」）

【資料・ヒアリングを通じた感想】

確かにここで示されている数字では、2002年の数字よりも2003年の数字のほうが相当向上し、2002年の他の

私大比較でも上回っているのですが、この限りでは成果は着実に上がっていると言えます。然し、民間の企業では、「何故そうなのか？」の原因・結果を鋭く分析し、不明の点は更に「何故？」を追求するのが当たり前であり、この点の反省・評価に物足りなさを感じます。

学生は、概して全カリに対して賛成・満足の意を示しているように見受けられます。その一部を紹介しますと、「A・B群ともメニューに満足」「専門課程の補足に有用」「希望の科目を自由に選択」等。一方、不満は「聴講では単位をもらえず不満」「授業の学生が多すぎる（大人教授業）」等。「大学白書2002」に問題点と課題として提起されているように、「教育責任の希薄化」「授業の講演化」「講義内容の低水準化と単位認定基準の低下」に真摯に向かい合い、学生にとって「安易さの象徴」とならぬことが肝要と思います。

(4) 全カリの「ACTION：改善・改革」

2006年度に計画されている2つの新学部開設、既存学部・学科の再編に合せ全カリ全体の点検・評価とさらなるイノベーションを行う。学生による授業評価を重視し、それを通じて学生のニーズに正面から向き合う取組みを強化する。（「全カリニューズレター No.19」）

【資料・ヒアリングを通じた感想】

全カリのCHECK（反省・評価）として、多くの負の傾向を内包しているといわれ、将来的に何をどう創意工夫し改善・改革すべきか非常に複雑かつ困難な課題と思われまます。然し資料の中で、例えば、「異文化コミュニケーションの将来的展望」として、①さらなるカリキュラム・教材のイノベーション、②Webを利用した双方向E-learningの充実、③新学部へ理念の浸透拡大、④立教大学院一貫連携英語教育開発プログラムの発進等、具体的かつ有意義な施策が見られるのは特筆されます。全学的な連携による情報収集と分析・明確なビジョンと具体的施策作り・学内外への効果的情報の発信に一層の創意工夫が求められます。

特に学生達は、言語学習には満足しているように見えますが、能力の二極分化の傾向も感じられ改善策が望まれます。私は、職業上海海外勤務10年（香港5年・ロンドン5年）の経験から、語学修得と異文化コミュニケーション理解の必要性は充分認識しており、上記の改善・改革は大いに賛同します。語学の修得と異文化の受入れは、立教大学の最大の特徴と言えると思います。受験生の説明会で、「立教大学って英語ができないと入れないんでしょ？」という質問が最近良く出るようになったが、その答えは「いや、入れます」であると記述（「立教大学く全カリ」のすべて）されています。然し実社会では、「立教大学の卒業生は、

英語が相当堪能なのでしょう？」と質問されるのが一般的で、「はい、そうです！」と胸を張って言えるようになって欲しいと願います。

3. 「特色ある大学支援プログラム」の審査結果について

【審査結果】

財団法人大学基準協会は、平成15年10月6日付の全カリの審査結果として次のように述べています。この取組みは、リベラル・アーツ教育による「専門性ある教養人の育成」を目標に全学共通カリキュラムの大規模な展開として、一定の特色を備えていますが、他大学との同様の例と比較して、どのような際立った特色があるのか説明が不充分であること、今後の展開について十分な説明がないこと、教育結果の客観的評価が充分とは言えないなどの問題があり、特別に特色あるものとは認められません。

【審査結果の感想】

私は、全カリに関する苦闘の歴史、地道かつ真摯な取組み姿勢と多大な実効を見る限り、もっと高い評価を得られたのではないかと非常に残念に思います。書類審査を経てヒアリングに進んだ30件の中に残ったので、これまでの実績が評価された結果と記述している資料もあり、また、外部評価委員各位からも“紙一重”と高く評価されております。然し、自己満足に陥ることなく“何故審査ではもっと高く評価

されなかったのか？”“どうすればもっと高く評価されるのか？”と、改めて全カリの理念・目標の原点に立ち返って客観的に分析し、一層の改善・改革を進める必要があるのではないかと思料されます。多分に表現上、或いは、プレゼンテーションの巧拙に起因する面もあるのかも知れません。

また、“全カリは評価を得るためにやっているのではない”という反論もあるかとは思いますが、折角特色ある先駆的な立教の全カリを標榜するからには、正当に評価されるよう効果的・効率的にPRすることも必要でしょう。

12月20日に中教審は中間報告として、大学全入時代が当初予想より2年早まり2007年に到来することを踏まえ、大学が個性や特色を一層明確にしなければならぬと提言しています。今や全国の学生が大学の評価をますます重視して大学を選ぶ時代の流れ、或いは、社会全体が卒業生の専門性・教養をますます求める時代の要請にあって、立教大学が第三者機関からその特色である全カリの「専門性ある教養人の育成」が高く評価されるように、更なる改善・改革を進めることを期待して止みません。

つほのや まさゆき
(立教経済人クラブ会長、
昭和40年経済学部卒業)